

『火傷』 作：ポチ子

火傷をした。

小さな傷だった。

私はその傷を見て、思い出した。

母は火傷をすると、

嫌そうな顔をしながら、

歳をとると痕が残るんだと言っていた。

私もいつか小さな火傷が治らずに、

ずっと痕として残る日が来るのだろうか。

そして、どうやっても消えない傷が増えて行って、

私は、母と同じような顔をするのだろうか。

それはしようがない事だ。

逃れられないものだ。

でも、皆、傷が残るのは嫌だからと避けようとする。

逃げて、逃げて、逃げ続けても、

きつと傷は増えて、

癒えずに残り続ける。

そしてその傷たちを眺めながら、

私はきつと後悔するんだろう。